

チェスと社交

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026272

チェスと社交

鈴木実佳

1. はじめに

英文学とチェスと言って、まず多くの人が思い起こすのは、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』(1871)だろう。大英博物館のルイス島のチェスの駒(The Lewis Chessmen、12世紀の制作)は、理由なくキャロルと結びついているのであるが、おそらく勝手な連想である。このチェス駒は、『ハリー・ポッターと賢者の石』でもお馴染みだ。ルイス島のチェス駒がスコットランドの北西部に位置するルイス島で見つけられたのが1831年、ドジソンはその翌年に生まれた(Charles Lutwidge Dodgson, 1832-98)。「ルイス・キャロル」というペンネームは、CharlesとLutwidgeをラテン語化、英語化、そして姓名を入れ替えてでき、しかも他に3つの候補があって、そのなかから編集者が選んだというのであるから、Lewis島での発見にあやかってLutwidgeと名付けたというのではない限り、この両者は関係がなく、理由なく結びつけているという印象は正しい。さて、両者の間の直接の関係はないと認めるが、両者からチェスに関する要素をそれぞれもらって来よう。

大英博物館の館長を2002年から2015年まで務めたマクレガー(Neil MacGregor)が2010年にBBCのラジオ番組として放送した*A History of the World in 100 Objects*が好評を博した。大英博物館のコレクションのなかから100点を選び、それぞれのモノが語る歴史を読み解くシリーズだった。ルイス島のチェス駒が取り上げられた際、チェス駒が語ってくれることの焦点は、戦いにあった。まず番組の冒頭で、冷戦時1972年のアメリカのボビー・フィッシャーとロシアのボリス・スパスキーの対戦の際のフィッシャーの言葉、「チェスはボードの上の戦争である」を引いている。古くは、トマス・ミドルトン(Thomas Middleton, 1580-1627)の戯曲『チェス・ゲーム』(*A Game at Chess*, 1624)が、あからさまに政治的であるという理由で、スペイン大使の怒りを招き、大使が苦情を申し入れ

るという事態になった。チェスの対戦には、国と国との間の緊張関係を容易に重ねることができるのである¹。ルイス島のチェス駒では、中世の戦いにおける歩兵の無名性が、ポーンの駒の小ささと人間の形さえしていないことに現れること、戦いの残虐性を表す駒は恐ろしいみかけをしていることなどが指摘される。駒の中で注意を引いたのは、クィーンである。ルイス島のチェスが作られた時代、中世のチェスでは、この駒は斜めに1歩動くことができるだけで、後のクィーンのような強力な駒ではなかったという。それでルイス島のクィーン駒は、自らの無力さのために不機嫌で、その「むっつり具合がちょっと滑稽にみえてしまう。」²ルイス島のチェス駒は、チェスは戦争であるということと、そして西洋の後のチェスではクィーンが強力になるという点を確認させてくれる。

ルイス・キャロルの日記・手紙で、チェスへの言及をみると、「チェスに家族で夢中になっている」(1866年9月3日)とあり、他の3つの機会ではチェスは旅先の待ち時間あるいは列車の旅での楽しみを提供している。旅先で「私の携帯チェスが役に立った。」³『鏡の国のアリス』成立当時、アリス・リデル (Alice Pleasance Hargreaves, née Liddell, 1852-1934) はチェスができるよう駒の動きを学んでいた⁴。ドジソンはまた、二人の叔母が向かい合ってチェス対戦をしている写真まで撮影している。ここでは、女性たちがチェスを楽しんでいること、旅仲間の交流にチェスが一役かっていることに注目しよう。

ドジソンは、言葉のゲームを考案したり、子供たちにお話の楽しみを提供したりしているので、その彼が女の子たちにチェスを教えることは、ドジソンの娯楽提供の持ちゴマの多さを表していると考えられることもできるだろうが、19世紀にチェスを学んだ女の子は、リデル姉妹だけではなく、彼女たちが非常に特殊な環境にあったということは意味しない。たとえば、1842年の国会議員の娘の記録を参照しよう。アナ・スタージェス・ブーン (Anna Sturges Bourne, 1809-1891) の手紙には「私たちはお茶の前にチェスを楽しむことにしている」(‘We

¹ Thomas Cogswell, 'Thomas Middleton and the Court, 1624: "A Game at Chess" in Context' *Huntington Library Quarterly* 47-4(1984): 273-288; Gary Taylor, 'A Game at Chess: General Textual Introduction', in *Thomas Middleton and Early Modern Textual Culture: A Companion to the Collected Works* (OUP, 2007).

² http://www.bbc.co.uk/ahistoryoftheworld/objects/LcdERPxmQ_a2npYstOwVkA

³ In a letter dated 19 April 1862 in *The Letters of Lewis Carroll* ed. Morton N. Cohen and Roger Lancelyn Green. Vol.1: ca.1837-1885 (London: Macmillan, 1979); *The Diaries of Lewis Carroll*, ed. Edward Wakeling (Luton: Lewis Carroll Society, 1993-2007), vol. 5, pp. 172, 173, 189, 283, 349. <http://lewis Carroll society.org.uk/pages/aboutcharlesdodgson/activities/chess.html>

⁴ <https://en.chessbase.com/post/lewis-carroll-y-su-alicia-jugando-al-ajedrez-por-sergio-negri-2018>

play at chess before tea') とあり、チェスは、娘と母親の日常の習慣であり、特別なイベントではない⁵。別の女性は、複数の人々と共に楽しめるチェスの娯楽性を強調している。「何年もやっていなかったのだけれど、別の娯楽 (another dissipation) にはまってしまいました。チェスです。……フレッドは私にとってはまったく敵わない相手だったのだけれど、メアリーと私のチームはとても相性がよくて (went on sociably)、……4人で楽しいゲームをしました (we had a very merry game of 4)。」⁶チェスのゲームが作り出す場は、仲間の打ち解けた (went on sociably) 陽気な (a very merry game) 気晴らし (dissipation) の場である。

2. 二重のハウ

この小品の主演は18世紀の女性である。18世紀の一人の女性がチェスを介して関わった文学的展開、政治的接触をみとめることにする。キャロライン・ハウ (Caroline Howe, 1721-1814) は、社交界で人々との交友を活発に保って長い人生を生きた女性である。彼女は、ハウの家に生まれ、この家は家族の繋がりを密にもつ家だった。父は早く亡くなった (Emanuel Scrope Howe, second Viscount Howe, 1698/9-1735) が、母は政治と社交の世界で活躍していた。母シャーロット (Charlotte Howe, Viscountess Howe, 1703-1782) は、ハノーヴァーの貴族として生まれた (Sophia Charlotte Mary von Kielmansegg)。母の父は、ハノーヴァー選帝侯に仕えた貴族であり (Johann Adolf, Baron von Kielmansegg, d. 1717)、その妻 (Sophia Charlotte von Kielmansegg, Countess of Darlington and Countess of Leinster, 1675-1725) は選帝侯の異母妹であった。ハノーヴァー選帝侯がジョージ1世として1714年にイングランドに渡った際に同行してきた。シャーロットの母はジョージ1世の愛人であり、シャーロットはジョージ1世の娘であるというゴシップが流れていた。噂に過ぎないとしても、シャーロットはハウ家に相当な財産と王室との繋がりをもたらした。キャロラインの弟たちは、軍で傑出したキャリアをつくっていく。リチャード・ハウ (Richard Howe, 1st Earl Howe, 1726-1799) は、海軍提督となり、ウィリアム・ハウ (William Howe, 5th Viscount Howe, 1729-1814) は陸軍将軍で、アメリカ独立戦争時のイギリス軍総司令官だった。キャロラインは、母及び弟たちと頻繁に行き来して

⁵ Hampshire Archives and Local Studies 9M55.F19/22. 彼女の父は William Sturges Bourne, MP.

⁶ Hampshire Archives and Local Studies 91/55/F45.

いた。

キャロラインは、同じ苗字をもつジョン・ハウ（John Howe）と結婚した。が、比較的早く（おそらく1769年ころ）夫を亡くし、45年ほどにわたる長い未亡人としての生活を送ることになった。母親シャーロットも47年間未亡人として過ごしており、宮廷との繋がりを保ち、政治的状況に明るい情報通の生活の手本が身近にあって、キャロラインは母親よりは地味ではあるが、安穩で自由な未亡人の社交生活を送った。

キャロライン・ハウがいつからチェスを嗜んでいたかは不明である。はっきりと記録に残っているのは、中年以降の1760年代半ば（45歳くらい）、1770年代半ば（54歳くらい）の対戦である。

まず、1760年代の対戦は文学的展開をもつことになった。彼女がある男性と対戦し、彼の姉がそれを題材に、英雄詩体二行連句で120行に及ぶ詩を書いている。相手は、モリス（Valentine Morris, 1727-1789）で、姉のセアラ・ウィルモット（Sarah Wilmot, née Morris, c1724-1793）の詩作に題材を提供することになった⁷。

モリスの家は、アンティグアの砂糖プランテーションで財を成し、ウエールズにネオ・クラシカルな豪邸ピアスフィールド（Piercefield House, Monmouthshire, Wales）を所有していた。ヴァレンタイン・モリスは、芸術に造詣の深い人物で、また新たなアイデアを実行に移す気概と資金に恵まれて育った。美しい自然に恵まれたワイ・ヴァレー（The Wye Valley）を観光地化すべく、交通の便をととのえたのは彼だと言われている⁸。ピクチャレスクの美学・風景学に大きな影響を及ぼしたギルピン（William Gilpin, 1724-1804）は、ヴァレンタイン・モリスの趣味を代表する土地をみて「非常にロマンチックであり、最高に喜ばしい想像力の奔出を促すものだ」と激賞した⁹。

キャロライン・ハウとチェスの対戦をもつ1760年代半ばは、モリスの人生が大きく動こうとしている時だった¹⁰。このころ、彼はカリブ海のセント・ヴィンセントにて、活発に活動し、運命を切り拓こうとしていた。姉のセアラ・ウィ

⁷ 'To Mrs Howe on her challenging Mr Morris to a game of Chess' in Chawton House Manuscripts, No. 4946, Elizabeth Sarah Wilmot notebooks, notebook I, pp. 31-7.

⁸ Ivor Waters, *The Unfortunate Valentine Morris* (Chepstow, Mon.: The Chepstow Society, 1964).

⁹ Waters, p. 17.

¹⁰ Chawton House Manuscripts, No. 4946, Elizabeth Sarah Wilmot notebooks. この詩帳面の前後からすると、1761年と1767年の間にチェスの対戦があったと推測される。ハウが有名になっていることから1760年代半ばと考えるのが妥当と考えられる。

ルモットは、結婚後ロンドンのブルームズベリー・スクエアに住み、裕福な生活を送っていた。彼女は、詩作好きで、娘にも早くから詩作を勧め、共同で詩作ノートを残している¹¹。

弟とハウのチェスは、双方の作戦、攻撃と防御、つる不安と高まる期待、糠喜びに絶望、勝利と敗退の描写を促し、ウィルモットはそれを英雄叙事詩の壮大な世界に仕立て、18世紀のチェスの有名人フィリドーを登場させるだけでなく、ギリシャ神話にあやかり、また、地元ウエールズの神話と伝説的人物も取り込んで豊かな世界を作り上げた。彼女の想像力は、小さなチェス盤から、時を超え、国を超えていく。

弟を応援しているので、対戦相手のハウは、冒頭から「誇り高く自惚れの強い女」として登場する¹²。あくどい手を使うのも厭わない、そして手練手管に長けた微笑みと、妖婦キルケーのような魅惑的な物腰、ミネルヴァの知恵をもって武器を繰る「誇り高く自惚れの強い女」である。ハウは、社交に長け、知的で如才ない戦術家である。一方、弟モリスは、北米カリブ海に及ぶ強大な帝国を支えるビジネスマンとして、公明正大、人道的で、英国的忠義心に満ちた、女性に礼を尽くす「騎士的」な人物である：

運命が遠い彼の地へと運び
成長した時には、帝国のために働く運命
栄える世界に道をたどるようにと示す
軍神マルスの姿をして、人道と英国的忠義心が
ローマ人の勇敢とギリシャ人の技に宿っている¹³

そんな道徳と勇気と技能を備えた神々しい若者であるが、相手は手強い。なにしろ相手は「二重にハウ」(Double Howed)なのだから。キャロラインは、ハウ家に生まれ、ハウと結婚したので、二重にハウである。そして、キャロラインの弟リチャード・ハウは海軍指揮官として、7年戦争(1756-1763)における功績により、既に有名人になっていた。ゲームは2ゲーム先取の3ゲームマッチで、互いに1ゲームずつとりあった。さて、最終ゲーム。ハウが勝ちそうだ。「こちら側のキングが追い詰められ、運命をまもなく受け容れなければならない

¹¹ Chawton House Manuscripts, No. 4946, Elizabeth Sarah Wilmot notebooks.

¹² Notebook I, p. 31.

¹³ Notebook I, p. 33.

という局面]、「キングはどこにも動けない、どの駒も介入できない」¹⁴。しかし、モリスはなんとか逃れ、なんと最後は勝利する。流れを変えるのは、ウエールズの守護聖人聖デイヴィッドのご加護と、ウエールズの神話的救世主カドワラデルである。

これ [不利な状況] がわかったので、私の祈りをささげた
偉大なるカドワラデルの神聖なる国にむけて。聞いてください
そして聖デイヴィッド、私たち民族が崇拝する聖人
この悲惨な、このひどい不名誉からすぐに私を助けてくださいと
そして私はまっすぐ前を見て、探求の目でみつけたのです
さすらいのルークが、警戒されないままにいるのを
素早く私はルークを一番向こうに放ち
キングをとらえ、勝利は我がものに¹⁵。

ウエールズゆかりの王・聖人を登場させるにあたり、自分たちの名前 ‘Morris’ も、ウエールズらしく ‘Mawr Rhys’ と綴り、自分たちの祖先がウエールズにルーツをもつことを想起させる¹⁶。こうしてモリスは、ハウに追い詰められ、危ういところで最後にどんでん返しがあって、2勝目をつかみ、勝った。

この詩は形式から言って、ドライデンやポープが洗練させて傑作を生みだした英雄詩体二行連句を用い、壮大な英雄の冒険を描写する意図をもつものだった。英雄が対峙する女は、英雄が立ち向かうに値するような難敵として描かれる。英雄は、冒険を重ね、絶体絶命の危機をかわして凱旋する。18世紀の英雄は、社交的で道徳的、公共心をもち、人間味豊かで、近代人の美德を備え、連合王国の勇士でありながら、しかも中世の騎士風の女性にたいする礼儀をそなえ、そして古くからウエールズの地域に根付く伝説に支えられる。チェスの疑似戦闘は、男女を問わず参加することができる場を提供し、それぞれが知恵と教養と策略と品性を発揮する空間であり、またその対戦は家族友人に観戦の娯楽を提供した。

ウィルモット母娘が詩のノートブックを作成していたころ、ウィルモットの夫は、ハンブシャのファーンバラとロンドンのブルームズベリー・スクエアに

¹⁴ Notebook I, p. 35.

¹⁵ Notebook I, p. 36.

¹⁶ Notebook I, p. 36.

居を構え、法律家として成功していた。彼は、社交界の顧客も多かった画家レノルズや、文壇の人々との交流を楽しみ、文化人の交流の輪の中であって生活を享受していた。ハナ・モアには、ウィルモットは「この上なく壮麗な」生活を送り、しかも「理性的で分別のある」行動をしていると描写され、富の誇示と知的な生活の両立を褒められている¹⁷。一方、弟のモリスはあまりにも寛大で気前よく、親から受け継いだ幸運を保持することができず、人生後半は財政難に陥っていくことになる。1771年には議会の補欠選挙に出馬したが、落選し、また妻はその心労も手伝って、正気を失い、施設に収容された。モリスが4,594ポンド13シリング8ペンスの借金のために債務者監獄に収監されたのは、1782年4月22日のことだった。彼は所領ピアスフィールドを売りに出し、最期はロンドンの姉宅で1789年8月26日に亡くなった¹⁸。

3. フランクリン

ハウがチェスをしたことがわかっているもう一人の対戦相手もまた大西洋を越えて行き来する旅人で、知的好奇心に満ち、活躍の場面が多岐にわたる。この人は、栄光の生涯を送る。1774年11月のはじめ、王立協会の会合で、マシュー・レイパー（Matthew Raper, -1778, fellow 1754-）はベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1705/06-1790, fellow 1756-）と会い、ある婦人を訪ねてチェスをするように誘った。フランクリンが息子に宛てた手紙によれば、「私とチェスの対戦をしたいという女性がいて、どうやら私に勝てると思っているらしく、私を連れてきてほしいと彼に頼んだらしい。その女性と知り合いになるのは私にとって良いことだと彼は言っていた。女性というのがハウ卿の姉らしく、この挑戦を断るなんてことはしないでもらいたいということだ。」¹⁹これが1774年末のことであるから、チェスのお誘いとはいえ、フランクリンにとってイギリス側の要人の姉に会いに行くことは当然相当な配慮を要するものであり、フランクリンはすぐには訪問しなかった。ハウは勿論、どういう立場にある人を誘っているのか知っていた。実際彼女は、レイパーの仲介を頼む以前にフランクリンと会っていた。フランクリンは1750年代から1770年代半ばの多くの時間をロ

¹⁷ Quoted in Lyster, *A Family Chronicle, Derived from Notes and Letters Selected by Barbarina, the Hon. Lady Grey*, p. 3.

¹⁸ Waters, pp. 19-29, 73, 72, 75.

¹⁹ To his son, William Franklin: Journal of Negotiations in London for 1775, in the Papers of Benjamin Franklin, Packard Humanities Institute.

ンドンで過ごしており、1767年にスペンサー伯爵夫人（Georgiana, Countess Spencer, 1736-1814）の問いに答えてフランクリンについて所感を述べている。ハウは、「フランクリンと話した」ところ、「申し分なく信頼できると確信をもって言える」人物であると請け合っている²⁰。レイパーに再度促されて、フランクリンはハウ夫人を訪ねることになった²¹。一度訪ねてみると、訪問を重ねることになった。キャロラインを通じて、同じグラフトン・ストリートに住むハウ卿（Richard Howe, 当時Viscount Howe）に会うことになったので、キャロラインとのチェス会合に関する記述を額面通りに受けとって良いかどうか、判断は難しいが、少なくとも文面上は、フランクリンはキャロラインの教養豊かな会話に魅せられ、彼女とチェス盤を介して過ごす時間を楽しんだ。「私は、……その女性と数回対戦した。彼女はたいへん気の利いた会話のできる人で、物腰は人に喜びを与え、そのせいで数日後に再度お訪ねする約束を喜んでくれた。この新たな交友に、いかなる政治的用件が関わろうとは思ってもよらなかったのであるが。」²²彼のチェスをめぐる記述では、チェスの勝負がどうなったのかということよりも、対戦相手の人柄をみることに重点がある。1775年の初めには、ハウがフランクリンに宛てた手紙でチェスに誘っている。この手紙は、「とても嬉しいプレゼントを頂戴し、それをたいへん楽しんでいる」という御礼が主旨で、この「プレゼント」というのは、彼が執筆したチェス本かもしれない²³。

政治家であり、科学を愛好し、発明家であり、著述家で社交家であって、啓蒙の人であったフランクリンと、ロンドンの知的な社交家ハウ夫人との間のチェスは、18世紀の社交性（sociability）を代表する場であった。ハウはフランクリンと共につくるチェスがとりもつ交友の場を楽しみ、「先生のお時間が許せば、今週の午前中ならいつでも、ご都合のつく限り何度でもチェスをするためにお会いできれば無上の喜びですし、ご一緒していただけるようお願いするのにこ

²⁰ BL Add MS 75611.

²¹ チェスの邂逅があつてほぼ100年後、1867年にアメリカで育った画家Edward Harrison Mayが描いた対戦の様子は“Lady Howe mates Ben Franklin,”と称され、Mrs HoweはLady Howeと誤解されている。David Shenk, *The Immortal Game: A History of Chess* (New York: Anchor Books, 2006), pp. 88-94においても、彼女は一貫してLady Howeと言われているが、対戦したのは、母Lady Howeでも、弟の妻Lady Howeでもなく、Caroline Howeであり、彼女はMrs Howeである。

²² To William Franklin: Journal of Negotiations in London.

²³ フランクリンの「チェスの道徳」(‘Morals of Chess’)は、1786年12月に*The Columbian Magazine*に掲載された。ハウがプレゼントをもらったのは1775年であるので、この出版より10年以上前であるが、それよりさらに年月を遡った1757年4月29日に、フランクリンはアメリカにいる妻に宛てて、チェスに関して書いた手稿が棚にあるので送ってもらいたいと手紙に書いている。

んなに良い口実があるのを喜んでいます。」と手紙に書いている²⁴。フランクリンはハウを信頼できる女性であるとみなし、「知り合ってこんなにすぐにはあるけれども、分別と優れた理解力についてこれほど高く評価できる女性はいない」と考えた²⁵。フランクリンのロンドンでの住居（Craven Street）から、ハウの家（Grafton Street）は1.5kmくらいの距離で、訪問は容易だった。1774年12月と1775年1月に訪問が繰り返された。

フランクリンとキャロライン・ハウのチェスは、やはりフランクリンとリチャード・ハウの会談への準備となった。キャロラインが弟を紹介して差し支えないかと尋ね、彼女がメモを書くと、すぐにハウ卿がやってきた²⁶。前述の通り、ハウ姉弟はどちらもグラフトン・ストリートに住んでいた。1775年1月、2月、3月にハウ夫人の家で両者の会談が行われた。フランクリンは印紙税法をはじめとするイギリスのアメリカ政策に批判を述べ、アメリカの独立を確信しながら、両者の衝突ではなく交渉を企図していた。ハウ卿と会ったのもその一環だった。しかし、その間も、アメリカ情勢は刻々と移ろい、着実に戦争へ、そして独立へと進んでいた。フランクリンは、3月20日にロンドンを去り、フィラデルフィアに向かった。6月には、バンカー・ヒルの戦いが起った。この戦いを指揮したのは、キャロラインのもう一人の弟ウィリアム・ハウであった。イギリス軍は勝利し、大陸軍は撤退することになったが、双方多数の戦死者をだし、特にイギリス軍が被った損害が大きかった。

4. おわりに

ハウは、宮廷で活躍していた母の影響もあって、上流階級の人々との交友関係が広く、ロンドンから離れることが少なく、ボンド・ストリート脇のグラフトン・ストリートに住んでいるという地の利、自由で裕福な未亡人であるということなど、さまざまな条件が揃って、情報の集積地であるロンドンのゴシップと情報のネットワークのほぼ中心に身を置いていた。流行のものを察知する好奇心にも満ちていた彼女は、チェスのプレーヤーでもあったし、ロンドンにやってきたオートマトン「トルコ人」を逃すわけがなかった²⁷。1783年、彼女

²⁴ Caroline Howe から Franklin への手紙 5 通のうちの 1 通。in the Papers of Benjamin Franklin, Packard Humanities Institute. Library of Congress, 626659 = 021-436b.html

²⁵ To William Franklin: Journal of Negotiations in London.

²⁶ To William Franklin: Journal of Negotiations in London.

²⁷ Wolfgang von Kempelen (1734-1804) によって1769年に制作された。

は熱狂的にチェスを指す「機械のトルコ人」が展示されるので見に行きたいと記していた²⁸。しかし、別の用事があってその特別展示を逃したことを非常に残念がっている。結局、翌年になって目にしたが、この時には当初の熱狂が失せていた。「オートマトンとそれからマーリンを見に行った」と述べるだけで、2種のオートマタの様子、見た感想、特に、トルコ人のチェスの腕前をどう評価するか、チェスの対戦をしたいと思ったか、といった尋ねたくなるような事項についての記述がない²⁹。ちなみに、マーリンは、ジョン・ジョゼフ・マーリン（John Joseph Merlin, 1735-1803）が製作した銀色の実物大の白鳥のオートマトンである。「トルコ人」のチェスを指していたのは、機械に隠れていた人間であり、チェスをする機械は紛い物であったということが後に露見するが、ハウがこの見世物について何をどの程度知っていたのか、今のところ不明である³⁰。ハウにとって、オートマタはひと時の好奇心の対象となったかもしれないが、人間の知の機械性、科学の発達で機械が人間の知に近づく可能性を考えることも、そして戦いの勝負の結果、あるいはそこに至る過程でさえも、副次的な重要性をもつことであったのかもしれない。彼女が関与したことがわかっているチェスの場は、人と人が関わる交友の場であった。

²⁸ Oct 18, 1783, Add MS 75620.

²⁹ April 29, 1784, Add MSS

³⁰ 18世紀のオートマトンと20世紀のIBMの‘Deep Blue’については、John Sharples, *A Cultural History of Chess-Players: Minds, Machines, and Monsters* (Manchester: Manchester University Press, 2017), pp. 83-104.